

工業3部門

北信越大会に出場!

武工新聞
第36号



Technical
News
Paper

発行日
8月20日(金)
発行者
武工新聞部

武工が上位独占

七月下旬に行われた、ものづくりコンテストで武生工業の都市工学サークル、建築クラブ、工業化学科が三部門の上位を独占した。それぞれ、八月二十一日(土)から始まる北信越大会に出場する。

都市工学サークル

内角と距離を測定し、その結果の精度と時間を競う。

七月十三日(火)、福井県南越前町のリゾートたくらにて、都市工学サークル二チームがものづくりコンテストの測量部門に出場した。測量部門では、五角形のトラバースの



大会当日は、大雨が災いしてグラウンドがぬかるみ、地面が水平にならず大変だったが、今まで練習してきたチームワークで、悪天候の中でも優勝することができた。これによって北信越大会出場を決めた。

大会を振り返ると「自分たちの測定の結果は悪くなかったが、地面の状況が悪かったので、うまくできなかった。」と語ってくれた。



→一列目：小原さん(右)、藤木さん
二列目：右から、三田村先生、渋谷さん、山本さん、永谷さん

北信越大会は、八月二十四日(火)、二十五日(水)に県大会と同会場となるリゾートたくらで行われる。リーダーの小原啓輔さん(3・1)は「私たちは全国制覇を目指しているの、北信越の

建築クラブ

大会は通過点に過ぎない。優勝を目指してがんばりたい」と力強く答えてくれた。(山下)



↑墨付けする玉村さん
←モノミで刻んでいる齋藤さん



七月二十一日(木)、敦賀工業高校でものづくりコンテスト木材加工部門の県大会が行われた。出場選手は皆入賞するために練習を積んできた。

結果は、見事、玉村太克さん(3・1)が一位、齋藤快さん(3・1)が二位に入賞した。

優勝した玉村さんは、「練習では出来たところが本番で出来なかった。」と言うだけに、自己評価は七十八点と少し厳しめ。「県大会だったので人数も少なく、レベルも高くない。優勝しても浮かれないようにしたい。」と次の大会への思いは強い。

齋藤さんは「正直、自分が入賞できるとは思ってもいなかった。」と驚いていた。「三時間以内に組み立てられるか自信がなかったけど、本番では上手くいった。」と安堵の表情で語り、自己評価は八十点。

最後に北信越大会の向けての意気込みを聞くと、玉村さんは「去年は

結果が出なかったのが今年、結果が出るよう全力で頑張りたい。」と齋藤さんは「まだまだ練習しなければならぬことがたくさんあるので、福井県代表としてもっと上達していきたい。」と力強く語ってくれた。

工業化学科

七月二十三日(土)、本校にて、ものづくりコンテスト化学分析部門が行われた。化学分析部門の実験題目は、中和滴定を基に、水酸化ナトリウムを用いて資料水中の酢酸の量を調べ、定量し、含有率を求めると言うものだ。

この大会で、梅原猛さん(3・3)が一位、大下隼人さん(3・3)が二位に入賞した。二人は、八月二十四日(火)、二十五日(水)に行われる北信越大会に出場する。

福井県大会は、少人数のため、生徒一人に審査の先生が一人ついていた。そのため、張り詰めた雰囲気の中、実験



↑表彰状を手にする
左から大下さん、梅原さん



が行われたようだ。その中で「いつもより悪かったが、入賞できてうれしかった。」と喜ぶ大下さん。
北信越大会では「優勝を目指す」と決意を語ってくれた。(梅田)

▼「この時期にバイクに乗ると、とても気持ち良い。」誰かにそう聞いたことがある。夏は晴天が多く、熱い空気の中「風を斬る」瞬間が気持ち良いのだろう。特に、大型車で高速道路を走っている姿を見ると、とても楽しそうだ。▼バイクには、小型車、中型車、大型車がある。中型車で有名なのはオフロードバイクなどだ。大型車はGSXやXR、カワサキのZII、ハーレーダビットソンなどがある。大型車の最大速度は220〜300km前後まで出せる。しかし、高速道路の制限速度は120kmまでなので実際に走ると違法になり走ることができない。大型車の魅力はスピードなので、実際に走るにはサーキットに行くしかない。▼バイクは小さなパーツを交換するだけでも性能が変わる。本を読んだり、他の人がチューンしたモノを見たりすることで、改造の技術が上達する。改造したエンジンやバイクを動かしたときに、音や回転数が変わったときが一番嬉しい。▼今回、ものづくりで本校の生徒が三部門で北信越出場を果たした。目標を持って一つのことに取り組むことは大変だが、目標を達成できたときの嬉しさは本当によくわかる。ぜひ、北信越でも頑張ってもらいたい。(竹村)

女生徒初の快挙



↑大会の賞状を掲げる藪下栄美さん

藪下栄美さん(3・4)は、七月十九日(月)に行われた、ものづくりコンテスト機械系旋盤部門で第三位に入賞した。大会初の女生徒の入賞にもなり、大きな成果となった。

この大会では、旋盤の加工精度を競うもので、千分の一ミリの加工技術を要求される。さらに時間制限があり、五分につき点数が一点ずつ減点されていく。そのため、会場全体で焦りの雰囲気があったようだ。その中で藪下さんは、時間を気にすることなく、集中して作品を制作した結果が三位入賞だ。

入賞が決まったときを「自分でも

びっくりで、入賞するとは思わなかった。でもすぐには実感がなく、学校の伝達表彰で三位入賞を実感した。」と振り返っていた。しかし、一位と二位しか北信越大会に出場できないので、少し残念そうだった。

コンテストの結果について、藪下さん自身は満足していない。「緊張や不安が大きく、100%の実力を発揮できなかった」と悔しそうな表情で話してくれた。

藪下さんは、八月一日(日)に開催されたWRO福井県大会にも参加している。大会の悔しさをバネにWROでは、持っている力を全て出し切って大会に臨んだことだろう。

(加藤)

子供たちにも楽しませ

八月七(土)・八日(日)に、サンドーム福井でおもしろフェスタが開催された。

おもしろフェスタは、福井県内の企業や高校がサンドームに集まり、



↑ 割り箸鉄砲(上・右) ゴムボール製作(右)

ものづくりの体験や福井県内の産業に触れることのできるイベントだ。会場内の特設ステージでは、イヤちゃんや県内の園児たちによる和太鼓やソーラン節、ダンスなどが披露され会場を盛り上げた。また、場内は始終和やかな雰囲気、親子連れや友達を誘って参加した子どもたちで大盛況だった。

本校からも、割り箸鉄砲、ゴムボールの製作教室、スマートボールなど、



↑ 子どもたちと触れ合う生徒たち

3種類のものづくりのブースを設けた。本校の生徒たちは、子どもたちに優しく分かりやすいように教えていた。割り箸鉄砲では、カッターやはさみを使うので、保護者の方にも参加して親子が一緒に製作に取り組んでいた。製作中は笑顔が見られ、作り終わった後は、的に試し打ちをして楽しそうに遊んでいた。

ゴムボール作りは、材料を紙コップに入れ、割り箸で混ぜるといった簡単な作業だったので、小さい子どもでも楽しく作れたようだ。

この体験を生かして夏休みの自由研究に役立ててほしい。

(辻岡)

アイ Love 工業



↑ 壇上で話すスティーブン先生

七月二十日(火)に学校を離任されたスティーブン・マンガン先生に、この時の心境を伺った。

離任式では、学校のみんなと離れるのが悲しいと、もらしたスティーブン先生。壇上で話した日本語の挨拶は、とても緊張したそうだった。

学校で一番楽しい思い出は体育祭。先生の母国のアイルランドとは違い、とても興味深かったと話していた。本校に対する気持ちを一言で表現するならば、

「I Love this school!」

最後に生徒たちへのメッセージを伺うと、「とても楽しかった。あなたたちと会えてうれしかった。私はみんなが英語を好きになることを願っている。」と笑顔で話してくれた。

積極的に生徒たちに話しかけてくれたので、とても気楽に話ができるスティーブン先生。放課後も生徒と会話する光景がよく見られた。いつも、私たちが英語を好きになるように、様々な工夫をしてくれた。また、私たちとコミュニケーションをとるために日本語の勉強にも励んでいた。本当に感謝の気持ちでいっぱいだった。

先生は母国のアイルランドに帰国された後、大学院で国際関係の勉強を続けるそうだった。是非、頑張ってください。

(小西)

編集後記

猛暑が続くなか、生徒はみんな、部活動をはじめ、資格取得の補習やものづくりコンテスト北信越大会出場のための練習、そして、夏休みの宿題に毎日励んでいる。

涼しい図書館で活動しているのは心苦しいが、これからも新聞部は暑さに負けないよう、頑張っているみんなを取材をしていきたい。

みんな、残り少ない夏休みをエンジョイしようじゃないか。

文化部のインターハイ



全国総合文化祭に参加

八月一日(日)から五日(木)まで、第三十四回全国高等学校総合文化祭宮崎大会が行われた。一日目に行われた総合開会式には本校新聞部部长、福山彰さん(3・1)が福井県代表として福井県をアピールした。

私たち新聞部は、新聞部門に参加し、全国の新聞部員との交流新聞製作を行った。五つのコースに

分かれ、各班ごとに宮崎県の観光地などを回り、新聞のネタ探しに奔走した。

や、「がんばろう宮崎」と掲げられたたくさんの店を見て、宮崎県が復興に尽力しているのを感じているようだった。交流新聞を通して、全国の生徒と交流し、多くのことを学んだ。

なお、本校からは、新聞部門の他に美術・工芸部門にも、吉澤直也さん(3・1)が参加している。

(細井)